

2021年9月NHK関東甲信越地方放送番組審議会

9月のNHK関東甲信越地方放送番組審議会は、17日(金)、NHK放送センター(ウェブ開催)において、9人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、2021年度後半期の国内放送番組の編成について説明があり、2022年度の番組改定とあわせて意見の交換を行った。続いて、長野放送局の取り組みと今後の予定について報告した。その後、知るしん 信州を知るテレビ「教えて! 信州ヒストリー 子どもたちがみる戦争」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、10月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長 小野 訓啓 ((株)めぶきフィナンシャルグループ取締役)
委員 石塚 愛 (横浜市立大学附属病院チャイルド・ライフ・スペシャリスト)
泉田 佑子 (書家)
今村 久美 (認定NPO法人カタリバ代表理事)
尾形 玲子 (養蜂家、ひふみ養蜂園(株)代表取締役)
片桐 幹雄 ((株)野沢温泉代表取締役社長)
杉山 正司 (元埼玉県立文書館館長)
仁衡 琢磨 (ペンギンシステム(株)代表取締役社長)
宮田麻一美 (万座温泉日進館女将)

(主な発言)

<「2021年度後半期の国内放送番組の編成」および
「2022年度の番組改定」について>

○ NHKプラスについて、地域の放送番組も充実していく予定なのだろうか。

(NHK側)

拠点放送局で放送しているニュース番組の配信など、サービスの拡充に向けて準備を進めているところだ。

(NHK側)

南関東エリア以外の地方向け放送番組の一部は、見逃し配信を中心にNHKプラスで提供している。現在は大阪局が18時台に放送している「ニュースほっと関西」を見逃し配信しているが、今年度後半にはさらに2つの拠点放送局のニュース情報番組を配信することなど、サービスの拡充を検討している。

- NHKプラスで全く配信されていない番組や、配信されていても一部のシーンが見られない番組があるが、どのような理由なのだろうか。

(NHK側)

総合テレビとEテレの全国放送番組と東京の地域放送番組は、権利上の問題がなければ基本的にNHKプラスで配信しているが、インターネットで配信する権利が取れていない番組やシーンについては配信ができない。なるべく多くの番組を配信できるよう努力を続けたい。

- 有料の衛星放送事業者などでは、連続ドラマの初回だけを無料放送するなど、視聴者を契約に結びつけようとする努力がなされている。BS4KやBS8Kの放送は、まだまだ一般的な認知が広がっていないと感じているので、BS4KやBS8Kで放送した番組をPRのために地上波で放送するなど、普及に資するような取り組みをお願いしたい。

(NHK側)

頂いたご意見はとても重要な指摘だと考えている。BSプレミアム番組を総合テレビで放送するなど、放送波をまたいで展開することでより多くの視聴者に届くような取り組みも行っている。BS4K、BS8Kはまだまだ視聴者も限られているので、指摘を踏まえて引き続き取り組んでいきたい。

<知るしん 信州を知るテレビ「教えて！信州ヒストリー 子どもたちがみる戦争」
(総合 7月9日(金)放送<長野県域>)について>

- 戦争については、話を聞いたり本で読んだりすることで、恐ろしいものだという

意識はあるものの、リアルに想像をすることが難しい面もある。戦争を身近に感じることが難しい若い世代にも分かりやすく伝わる工夫がなされており、すばらしい番組だった。子どもたちに戦争についてのイメージを聞くシーンから始まる演出は、多くの視聴者の心をつかんだと思う。戦争という重いテーマを子どもたちにレポートしてもらうことで身構えることなく番組を見られるようにしていた点もよかったと思う。子どもたちが戦争を経験した人たちにインタビューをしていたが、視聴者が知りたいと思うことを十分に聞いていたと思う。子どもたちの純粋なインタビューだからこそ、当事者たちの率直な思いを聞き出すことができたのではないか。過去の資料映像もうまく活用されていた。

- 子どもたちがナレーションをしたことで、多くの視聴者が子どもの目線で番組を見ることができたのではないか。30分弱の番組だが、詰め込みすぎにならない程度に多くの要素が盛り込まれており、すばらしい構成だった。当時の子どもたちが歌っていた替え歌を紹介したことで戦争の悲惨さが深く伝わってきて、とてもよかった。満蒙開拓青少年義勇軍として中国東北部に渡った方の話からは、当時の様子や社会構造の問題点がよく伝わってきた。取り上げられていたさまざまな要素を分かりやすい順番で整理して伝えており、誰にでも理解しやすい内容になっていた。「なぜ偉い人だけ生き残るようにしたのか」というような子どもたちの率直な疑問が紹介されていたことも評価したい。子どもたちの取材を受けた方が自分の頭で考えることの大切さを伝えるシーンが印象に残った。

- 子どもたちの目線で制作されており、とてもよい構成の番組だった。実際に戦争を経験した人が少なくなっている中で、このような番組も制作できなくなるのだろうと思いながら視聴した。戦争のことを語りたくないという人も多い中、語り部を探すことにも苦労があったと思うが、適切な方々に取材していると思った。インタビュアーの子どもたちと同世代の時期に戦争を体験していたことも、この番組の重要なポイントだったと感じた。松代大本營地下ごうのガイドの方は、子どもたちにうまく問いかけて考えさせることで、子どもたちの素直な思いを引き出しており感心した。子どもたちが感じたことを紙に書いてもらう演出が印象に残った。朝鮮人の強制連行や強制労働について触れられていた点もよかった。一方で、戦争の体験談は男性だけではなく女性からも聞きたかった。当時の日常生活の苦労がどのようなものであったかという視点も取り入れるべきだったのではないか。また、テロップが過剰に感じる部分があったのは残念だった。

(NHK側)

戦争に関するさまざまなトピックを盛り込んだ番組だ。子

どもたちがナレーションすることで、コメントをより平易な表現にするように心がけた。子どもたちだけでなく、大人の視聴者にも伝わりやすい番組になったとすればうれしく思う。女性の視点が不足していたという指摘は今後の番組制作に生かしていきたい。

- 子どもたちが抱いた素直な感情にしっかりと向き合うことが重要であることを改めて感じた。戦争については、学校のほかさまざまな番組などで学ぶ機会もあるだろうが、戦争の悲惨さはやはり経験した人でなければ分からないこともあるので、経験した方々に自らのことばで語ってもらうことは重要だ。この番組を見て、人類が愚かなことを犯した事実を未来の子どもたちに伝えていく必要があると改めて感じた。いわゆるドキュメンタリーとは全く違う手法で制作された番組ですばらしかった。
- 番組の冒頭で女の子が明るい雰囲気の中で戦争のイメージについて語っていたが、驚かされるとともにさまざまなことを考えさせられる印象深いシーンだった。子どもたちの目線で戦争を伝える取り組みがすばらしかった。松代大本営の地下ごうの場面で男の子が発した「なぜ偉い人だけ生き残るようにしたのか」という率直なことばには、考えさせられた。ことばに映像が加わることで説得力が増しており、テレビの力を感じた。シベリア抑留について触れられていたこともよかった。実際に戦争を経験した方々は高齢のうえ、家族には話せないようなことも抱えているだろう。子どもたちに対してだからこそ、話すことができたエピソードもあったのではないか。女の子のナレーションも分かりやすくすばらしかった。戦争の記憶を伝えていくことはNHKの使命だと考えているので、引き続き期待している。
- 現代の子どもたちにとって、戦争は遠い話でリアリティーのないものだろう。この番組は、子どもたちの目線で戦争について伝えており、とても分かりやすかった。また、当たり前だと思われていることも疑う必要があることや、自分の頭で考えることの大切さを示唆していて教育的な視点からも良質な内容だと感じた。社会が大きく変容する中で、どのように世の中を捉えていくか考えるきっかけとなるような番組だった。当たり前とされていることや常識にとらわれ、思考停止に陥っている状況に気付くことは日本の将来を考えるうえでとても重要だ。戦争を扱った番組でありながら、背景にはこのような問いかけがあるように感じた。学校教材にすべきような良質な番組だった。

(NHK側)

戦争を経験した方々にとっては、純粋な子どもたちが接することで話しやすくなった面があったように思う。当事者たちが高齢になる中で、戦争の記憶をどのように未来につないでいくかはとても重要な課題だ。時が経つにつれて機会も限られてくるので、引き続きさまざまなことに思いを巡らせながら番組を制作していきたい。

- 子どもたちの視点で戦争を捉えた斬新な番組だと感じた。戦争という難しいテーマを、地域の視点も踏まえて幅広い世代に分かりやすく伝えておりとてもよい内容だったと思う。一方で、番組最後の「身近なおじいさんやおばあさんから話を聞いて、戦争のことを考えてみませんか」という趣旨のナレーションには違和感を覚えた。コロナ禍では、直接お年寄りから話を聞くことが実際にはとても難しいことなのではないか。子どもたちの目線で作ろうとした番組だが、大人の制作担当者がコメント原稿を書いたことで、結果的に教科書をなぞったような番組になってしまったように感じた。「なぜ偉い人だけ生き残るようにしたのか」というような、子どもたちの率直な疑問が語られる場面があったが、このような子どもたちの考えや思いをもっと紹介してほしい。また、子どもたちが戦争の歴史を学ぶことで、それを今後の人生にどのように生かしていくのかという視点があってもよかったと思う。
- 子どもたちが戦争について考える番組はこれまでに見たことがなく、新しい視点の番組だと感じた。子どもたちが出演したことで、家族で番組を見た人は親子で戦争について考えるよいきっかけになったのではないかな。満蒙開拓青少年義勇軍として中国東北部に行かれた方がつらい経験を語り胸が締めつけられた。自ら深く考えて善悪を判断することが重要であるというメッセージがしっかりと伝わってきた。子どもたちのインタビューを通してさまざまな方の話を聞くことができたのは意義深かったが、子どもたちが質問をしたり、話を聞いたりしているときの表情をもう少し見たかった。また、子どもたちの率直な思いをもっと伝えてほしい。子どもたちが取材した番組なので、同級生など多くの小学生が見たことだろう。テロップの漢字にふりがなが入っているとよかったのではないかな。
- 満蒙開拓青少年義勇軍として中国東北部に行かれた方の話からは、自らの頭で考えて物事を判断することが重要であることがよく伝わってきた。番組の中で紹介されていた替え歌の中に、「名誉の戦死」ということばがあったが、戦争を経験した方の中には、不愉快に思った人もいたのではないかな。子どもたちだけではなく、幅広い世代の視聴者が番組を見ていることを考慮して番組を制作する必要があるこ

とを改めて感じた。この番組は、戦争をどのように伝えていくべきかを明確に示していた。今後もこのようなすばらしい番組を制作し続けてほしい。

(NHK側)

難しいことばをなるべく使わないようにするなど、子どもたちにも理解しやすい番組にすることを心がけた。番組最後のナレーションへの指摘や、子どもたちの表情をもっと見たかったという意見は、今後の番組制作に生かしていきたい。さまざまな立場の視聴者がいることは今後も十分に配慮したい。

<放送番組一般について>

- 7月14日(水)と15日(木)の「とちぎ630」を見た。その中で、「NHK×とちテレ 備えるとちぎの水害“地区防災計画”で共助」というコーナーが放送されていた。宇都宮局と地域の民放がコラボレーションし、それぞれが制作した防災の企画を互いに放送していた。防災・減災を考えるべき出水期に、多くの視聴者に重要な情報を届けることができる取り組みで評価したい。レポートを制作したディレクターが出演していたこともよかった。災害時に地域の放送局が連携して情報を伝える取り組みが進むとよいと思う。
- 8月17日(火)の「首都圏ネットワーク」を見た。戦争を体験した人の遺品について扱ったコーナーがあったが、NHKプラスでは配信されておらず残念だった。多くの博物館は戦時中の資料の収集に苦勞しており、後発の施設は特に厳しい状況にあることを伝えていた。今回取り上げられていた戦傷病者史料館は、メディアなどでこれまであまり紹介されておらず、この史料館の存在を知らない人も多いことと思う。その意味でも、とてもよい企画だった。

(NHK側)

8月は戦争に関するニュースや企画をしっかりと伝えることを心がけ、「首都圏ネットワーク」では、8月16日(月)の週に戦争に関連した話題を数多く伝えた。戦争に関する遺品が失われつつあるということも踏まえて、この史料館を取り上げた。

- 新潟局では開局90年企画の1つとして若手のメンバーでチームを作り、新潟県の特産品である米づくりについて考えるプロジェクト「田んぼにかよって考えた」を展開している。ふだんはあまりテレビに出演することがないカメラマンなどがリポートをして伝えている。新潟局で働く職員の顔が見えると、思わず応援したくなる。ニュースなどでは収穫の様子だけが取り上げられることが多いが、この企画では雑草の除去や害虫の駆除など農家が苦勞している部分をしっかりと伝えていてすばらしい。特産の米について最新の情報も含めて余すことなく伝えようという思いが感じられるとてもよい企画だった。

- 東京2020オリンピック・パラリンピックは、新型コロナウイルス感染拡大の影響で1年延期されての開催となり、いろいろな意味で世界中から注目を集めた大会だったと思う。オリンピックの開会式の中継に手話通訳が付与されなかったことが残念だった。海外では手話通訳付きで伝えた放送局が何局かあったようだ。今大会のコンセプトが「全員が自己ベスト」「多様性と調和」「未来への継承」であっただけに残念だった。一方で、閉会式の中継ではEテレの放送で手話通訳が付与されておりすばらしかった。一般的には字幕放送を実施していれば手話通訳がなくとも問題がないと思われがちだが、字幕だけでは番組の内容を理解することが難しい人もいる。ろう者にとって手話は命を守る重要な言語だと位置づけられている。ろう者に寄り添った放送を今後も期待したい。

- 東京2020パラリンピックでは開会式や競技で、新潟県出身の方や選手たちが活躍して地元が盛り上がった。パラリンピックでの活躍が、共生社会のあり方や考え方を地域に広める一助になったことと思う。今回のパラリンピックではさまざまな成果があったと思う。障害者への理解の広がりなど、どのような変化があったのかについて詳しく取材して伝えてほしい。

- NHKが東京2020パラリンピックについてかなりの時間を放送したことで、日本社会の中で障害者に対する理解が深まったと感じている。大きな意義があったと思うし、多様性の考え方も広まってきたと思う。選手がメダルを獲得した際には、チャイム音つきでニュース速報しているが、事件や事故を速報するときと同じチャイム音なので不安になることがあった。よいニュースを速報する時は、別の音を使用するとよいのではないか。

(NHK側) 多様性と調和が掲げられた大会であり、NHKとしてもそれを反映した放送ができないかと考え、オリンピックの閉会式から独自に手話を付与したものをEテレで放送した。手話

は手ぶりのほか、通訳者の表情なども大切な要素になるため、なるべく大きいサイズで見やすくなるよう考慮した。NHKとしても初めての試みであり、今回の経験や視聴者からの反響も含めてしっかりと分析し、今後の番組制作に生かしていきたい。また、今大会ではパラリンピックについてしっかりと伝えることに力点を置いて取り組みを進めてきた。パラリンピックの競技そのものをより楽しんで見てもらえるよう、競技中継の実況や解説で競技そのもののおもしろさや選手たちの魅力を丁寧に伝えることを心がけた。NHKとして一定の役割を果たすことができたと考えている。

- 8月9日(月)のNHKスペシャル「原爆初動調査 隠された真実」を見た。冒頭の映像で一気に番組に引き込まれた。資料写真や映像がふんだんに使われていて、戦争の悲惨さがよく伝わってきた。なんともいえない子どもたちの表情に胸が痛んだ。被ばく量などについては、最新の技術を用いたグラフィックスで示していて分かりやすかった。原爆の問題については、日本だけではなくアメリカでも苦しんでいる人たちが多くいることに気づかされた。原爆投下から76年が経過しても、解決されていないことばかりであることがよく分かった。
- 8月13日(金)の終戦ドラマ「しかたなかったと言うてはいかんです」(総合後10:00~11:15)を見た。戦時中の生体解剖の罪を問われた医師が裁判にかけられ、罪の大きさや、命の重さなどさまざまなことと向き合うという内容で考えさせられた。妻夫木聡さんの演技がすばらしかった。戦争の悲惨さや恐ろしさがよく伝わってくる、良質なドラマだった。
- 8月10日(火)のフェイク・バスターズ「新型コロナワクチンと誤情報」を見た。SNSにはびこるワクチンに関連したデマや誤情報を分析し、いかにミスリードを防ぐかについて考える番組だった。生活に直結した身近なテーマで興味深かった。SNSに関するさまざまな問題を提起していたと思う。さまざまな分野を専門とする多くの人が討論をしており、内容に説得力があった。具体的な事例が分かりやすく示されており好感を持った。この問題の解決策を3点に絞って伝えており、参考になった。SNSでデマが拡散していく様子をうまく映像化して伝えていたことも興味深かった。デマが拡散していく様を見ると、自分の身近な人の情報が実は危険であることを実感した。NHKの報道における失敗例のほか、ミスリードを防ぐための取り組みなども紹介されており考えさせられた。

- 8月11日(水)の職場遺産～倉庫にねむる宝探し～「大手電機メーカー」(総合後7:30～7:57)を見た。電機メーカーの倉庫に眠っている資料を掘り起こし、過去を見つめ直すことで学びを深め、未来に生かすヒントや知恵を得るという内容で良質な番組だった。若い社員が、大先輩たちの知見を知ること、新しい製品を生み出すヒントにしており、温故知新がキーワードの番組だと感じた。一方、そのメーカーの未来技術遺産になる製品がたくさん紹介されていたが、その開発秘話をメーカー側が紹介するのではなくNHK側で調査していたことには少し違和感があった。病床にありながら製品開発に携わり、発売を見届けることなく亡くなられた方のエピソードに、日本のものづくりの精神をかいまみた気がした。このメーカーの理念の原点を見た思いだった。興味深い番組で、今後にも期待したい。

- 9月4日(土)に再放送された【ストーリーズ】ノーナレ「あるジャズマンの物語」を見た。両耳の聴力を失ったジャズベーシストの方に焦点を当てた番組だ。人工内耳を付けることで聴力はある程度戻ったものの、聞こえ方がこれまでと全く異なり、メロディーなどは認識できないとのことだった。人工内耳で取り戻した音の世界がどのようなものであるかを、映像で見事に表現しておりすばらしかった。人工内耳を取り外すシーンでは、番組の音声も無音になるなど、誰もがイメージしやすい演出がすばらしかった。ナレーションや音楽のない「ノーナレ」のコンセプトが存分に生かされていた番組だったと思う。物語を伝える際にはナレーションがつきものだが、NHKはこれまでも常識を打破するような番組を制作し続けており評価したい。音楽やテロップなどに工夫が凝らされたドキュメンタリーがある一方、「ノーナレ」のように番組を構成する要素をそぎ落とすことでより視聴者の心に訴求する番組もある。映像と音がとても工夫された、極めて良質な番組だった。

- 9月9日(木)のクローズアップ現代+「その校則、本当に必要ですか？ルール改革の最前線に密着！」を見た。学校の校則をめぐる動きについて、多角的に伝えた番組だった。多様性を認めていないような、時代に合わない校則は“ブラック校則”と呼ばれ、学校を責めるような論調で報道されることもある。先生たちも、すでにある校則が当たり前という環境に置かれたことで、変える手段を持ち合わせていないという側面もある。先生たちの本音に迫り、丁寧に紹介していたことを評価したい。教育や校則問題など、学校が悪者にされてしまうケースは多いが、実際には厳しい校則があるからこそ、わが子をその学校に入学させたいと思う保護者もいる。思い悩んで退職することを選ぶ先生たちもいる一方、保護者と学校の対話が始まっているという最新の動きを取り上げたことがよかった。時宜を得た話題なので、番組放送中に視聴者がSNSなどから参加できる仕組みがあるとなおよかった。

(NHK側)

SNSなどを活用して視聴者の声を番組の中で取り上げる取り組みは、検討を重ねながら進めているところだ。放送だけではなくインターネットなどさまざまな手段を活用し、より多くの人に最新の情報を届けていきたい。

- 9月14日(火)に再放送されたスポーツ×ヒューマン「戦い抜いて ふたり バドミントン フクヒロペア」を見た。バドミントン女子ダブルスで金メダル候補だった福島由紀選手と廣田彩花選手のペアについて特集をしていた。廣田選手が大会前に大けがをしたこともあり、結果的にメダルを獲得することはできなかった。オリンピックの話題が番組になるときは、どうしてもメダルを獲得した選手ばかりが取り上げられがちだが、今回は2人が戦う理由が掘り下げられていて興味深い番組だった。コロナ禍でオリンピックが1年延期されたことで、アスリートたちに大きな影響があったことを改めて感じた。廣田選手は大会に出場することも難しいような大けがを負っていたが、試合に臨むことで2人の絆が深まり、互いに支え合っていたことがよく分かった。メダルを取ることだけがすべてではないことを示した良質な番組だった。
- 8月26日(木)に再放送されたE TV特集「戦火のホトトギス▽17文字に託した若き将兵の戦争 塚本佑朗読」を見た。戦地に派遣された兵士が俳句雑誌「ホトトギス」に投稿した俳句をもとに、その句の背景にある家族への思いなどさまざまなことを掘り下げていた。丁寧に取材を重ねた内容で、戦争の悲惨さややるせなさをしっかりと伝えた良質な番組だった。
- 8月19日(木)のカラフルな魔女～角野栄子の物語が生まれる暮らし「海と旅」(Eテレ 後10:55～11:25)を見た。テロップがポップで美しく、視聴意欲をかきたてられた。鎌倉の美しい風景と宮崎あおいさんのナレーション、そして児童文学作家の角野さんの服装もとてもすてきで、番組の構成要素すべてに癒やされた。角野さんは芯の強さを持ちながらもかわいらしさがあって、憧れを覚えた。

NHK編成局
番組審議会事務局